

幸福をめぐるヴォルテール、ベンサム、そして J. S. ミル

江口聡

2023-06-08

この文書をレポートで参照・引用する場合は、文献表では以下のように表記すること。

江口聡 (2023) 「幸福をめぐるヴォルテール、ベンサム、そして J. S. ミル」、講義資料、6月8日版

1 ヴォルテール

- 18 世紀フランスの啓蒙思想家ヴォルテール¹⁾(1694-1778) の指摘。理性と良識が発達すればするほど人は不幸になるということがあるのではないだろうか。

旅行中、私は歳老いたバラモン僧に出会った。彼は賢明であり、非常に高度な知性と教養をそなえていた。さらに、彼はとても裕福であり、そのおかげで、ますます賢明であった。というのも、なにも不足なところがないので、彼は誰かを騙したりする必要がなかったからである。彼の家庭は三人の美女によって営まれていて、この美女たちは彼を喜ばすことに心をくんでいた。美女達と楽しんでいない間は、彼は哲学して時をすごしていた。彼の家は美しく飾られ、素敵な庭があった。近所に、歳老いた心の狭いインド人女性が住んでいた。この女性は愚鈍であり、ずいぶん貧しかった。



ある日、バラモン僧は私に言った。「私は生まれてこないほうが良かったのじゃ」と。わたしはそれはなぜかとたずねると、彼は答えた。「わしは 40 年も学び続けているのじゃが、この 40 年はまったくの無駄じゃった。私は他人に教をたれてきたが、私自身はまったく何も知らないままじゃ。こういうことを考えると、私の心のなかは恥と嫌悪感でいっぱいになり、人生が堪えがたく感じられるのじゃ。わしは時間の中で生まれ、時間の中で生きておる。しかし私はそもそも時間がなんであるかを知らん。賢者たちが言うように、私は二つの永遠の間の一点におる。しかしわしは永遠のなんたるかを知らん。わしは物質からできておる。わしは考える、しかしわしは自分の思考が何からできているのかわからん。わしの理性は、たとえば歩いたり食べたりすることのような単なる能力なのかどうかもわからんし、手でものをつかむときのように、頭で考えているといえるのかどうかもわからん。わしは、自分の思考の原因を知らないというだけではない。わしの行為の原因も同じくらい神秘じゃ。わしはわしがなぜ存

¹⁾ちなみに「ヴォルテール」はペンネーム。本名はフランソワ＝マリー・アルエ。

在しているのかわからん。しかし毎日人々はわしにこういう問題をたずねるのじゃ。わしは答えなければならん。そして、わしは喋る価値のあることをなにも持っていないのじゃから、私はたくさんたくさんしゃべって、その後でしゃべったことを恥ずかしく思うのじゃ」。

「ブラフマンはヴィシュヌから生まれたというのは本当かとか、神々は永遠なものとして生まれたのかそうでないのかとかたずねられるときはますますひどい。神々こそ、わしがほんのちょっとの観念も持っておらんという証人じゃ。わしの無知はわしの答え方にちゃんと表れておる。「おお、聖なるお方よ、なぜ悪が世界を覆っているのか、どうかおしえてください」と人々はわしに尋ねます。こういう質問をする連中は扱いにくいものじゃ。わしはそういう人々に、物事はできる限り最善なのだと教えたりするじゃが、^{いくさ}戦で滅ぼされた人々はその言葉を信じようとはせん——もちろんわしも信じられん。わしは打ちひしがれて家に引きこもった。わしは古い本を読んでみたが、心の暗闇は深くなるばかりじゃった。わし私は同輩と話をしてみた。ある同輩は、我々は人生を楽しまねばならん、人類全体を馬鹿にしなければならんと言った。また別の同輩は、自分はあまりに多くのことを知ってしまい、思想の迷路の中で迷ってしまったと言った。こういったことはどれもわしの苦悩を増やすばかりじゃ。わしは自分がどこから来たのか、どこへ行くのか、自分は何であり何になるのかを知らんと思うと絶望してしまうのじゃ」。

私はこの善良な人を本当に心配した。誰も彼以上に理性的で誠実な人はいないだろう。私は、彼の不幸は彼の理解力が発展し、洞察が優れたものになるに比例して増えているのがわかった。

同じ日に、私は彼の近所の老女に出会った。私は彼女に、自分が自分の魂の本性について無知であるという想念に悩まされることがあるかとたずねた。彼女はわたしの質問を理解することさえできなかった。彼女は人生で一度も、一瞬も、あのバラモン僧を苦しめた問題について考えたことがなかったのである。彼女は心からヴィシュヌ神の変化を信じているし、ガンジス川の水をちょっと浴びることができれば、自分は最高に幸福な女だと考えていた。

この卑しい生き物の幸福に感銘を受けながら、私は哀れな哲学者のもとへ戻った。「あなたは隣で何にも考えない木偶の坊が満足して生きているときに不幸でいて恥ずかしくないですか?」

「その通りじゃ」彼は答えた。「私は何百回も、お隣さんのように脳なしだったら幸せになれると自分に言い聞かせたんじゃ。しかし、わしはそんな幸福は欲しくはないんじゃ」。

バラモン僧の答えは今まで以上にわたしに感銘を与えた。私は自分自身のことを考えてみて、確かに、私は愚鈍になってまで幸せになりたいとは思わないと思った。

私はこの件を何人かの哲学者に披露してみた。彼らもわたしと同意見だった。「しかし、この考え方には大変な矛盾があります」私は言った。「というのは、本当の問題は結局どのようにして幸福になるかということのはずだからです。優れた頭脳を持っているかどうかなんてことがなにか重要なのでしょうか。さらに言いましょう。自分の境遇に満足している人は、たしかに自分が満足していることを確信しています。一方、理性を使っている人々は、自分が正

しく理性を使っているかどうかについてさえ自信がないのです。それゆえ」と私は続けた、「かりに良識 (bon sense) が我々の不満の原因そのものではないとしても、我々が良識を持たない方を選択しなければならないのは明白なのです」。皆は私に同意した。しかし、それにもかかわらず、誰も満足するために愚鈍になるという取り引きを受け入れようとはしなかった。このことから、私が結論したのは、もし我々が幸福の問題を考察するならば、理性の問題をより考察しなければならないということだった。

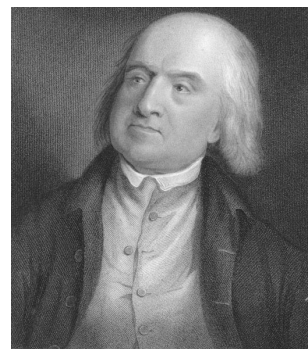
しかしさらに反省してみると、やはり幸福より理性を選ぶことには意味がないように思われる。この矛盾はどう説明されるのだろうか？他のすべての矛盾と同様に、もっと議論が行なわれねばならない。(江口聡訳) (Redman, 1963)^a

^aこの訳は江口によるものだが、植田祐次訳『ヴォルテール哲学コト集成』(上)に専門家による訳文がある。

2 ベンサム

- 功利主義の提唱者ベンサム (1748–1832) は、徹底的な幸福に関する快樂主義を採用した。幸福とは快樂に満ちた生活であり、快樂の価値は、その強度 (強い快樂の方が価値がある)、持続性 (時間が長い)、確実性 (快樂には確実なものと不確実なものがある)、遠近性 (遠い先の快樂より目の前の快樂に価値がある)、多産性 (ある快樂が他の種の快樂をもたらすことがある)、純粹性 (快樂に苦痛が含まれている場合がある)、範囲 (同時に多くの人に快をもたらすような活動がある) を考慮して判断される。
- ベンサムにとっては、つまらぬ子ども向けのプッシュピン遊びも、高尚な詩も、もたらす快樂が同じ量であれば同じ価値をもつ。

すべての芸術と学術——娯楽と好奇心のための芸術と学術の両方について語っているのだが——が持つ価値は、それが生み出す快に正確に比例している。ある人々が芸術や学術に認めようと試みているその他の卓越性は、実はまったくたわごとにすぎない。偏見を離れてしまえば、押しピン遊びは音楽や詩といった芸術や学術と同じ価値がある。もしも押しピン遊びが、より多くの快を提供するとすれば、それはより多くの価値があることになろう。文学 (poetry) や音楽はほんの少数の人々によってしか楽しめない。押しピン遊びは常に無害



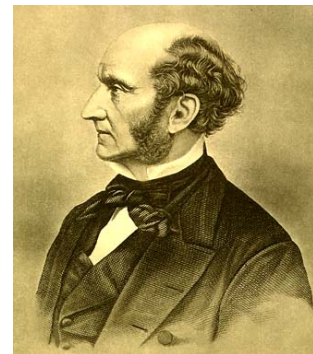
である。同じことが詩についても常に主張できれば好都合だが、実際にはそうではない。実際のところ、詩と真実との間には、本性上の対立がある。それは詩の誤った教訓とフィクション性である。詩者は常になにか偽であるものを必要としている。文学者が真実に土台を置くというふりをするときにも、その上にある装飾品はフィクションである。詩者の仕事はわれわれ

の感情を刺激し、偏見を助長することにある。真実、すなわちあらゆる種類の正確さは、文学者にとっては致命的である。文学者はなにごともし色眼鏡を通して見ねばならず、他の人々にも同じよう色眼鏡を通して見させようとするのである。(Jeremy Bentham, *The Rationale of Reward*, Book 3, Chapter 1.)

3 ミルの幸福論

- ベンサムの徹底した幸福主義・快楽主義はインテリ階層には評判が悪かった。我々は幸福以上に求めるべきものがあるはずであり、実際に幸福以外のもの（たとえば道徳的美徳）を求めている、というのである。
- ベンサムの弟子の J. S. ミル (1806–1873) は「快楽」は多様であり、人間に固有の高級な快楽も多いと主張。もっと複雑な幸福論を展開する。

ところでこの人生観は、多くの人々に、とりわけその感情においてまた意図においてもっとも尊重すべき人々に、抜きがたい嫌悪の念をよび起こしている。人生には「この人たちによれば」快楽より高級な目的はないと考えること——熱望し追及する対象として快楽より善く、快楽より高貴なものはないと考えること——を、この人たちはまったく野卑下賤^{やひげせん}とみなし、豚向きの学説と称する。豚とは、はるか昔にエピクロス派^aの人たちが侮蔑的になぞらえた動物であった。



エピクロス派的生活と畜生の生活の比較がいかに品のないこととと感ぜられるのは、畜生の快楽では、どうにも人間の幸福の概念を満足させないからである。人間は動物的欲情をこえる高い能力をもつ。そして、いちどその能力を自覚すれば、それらを満足させないようなものを幸福とは考えなくなる。・・・

もっとも、功利主義的著作者たちが一般に、精神的な快楽を肉体的な快楽以上に尊重したのは、主として永続性、安全性、低費用性などの点——つまり、内的本性よりも外的利点——で精神的な快楽のほうがすぐれているからであったことは認めなければならない。そして、これらすべての点について功利主義者は、自分たちの立場を十分明らかにしている。しかし、彼らは、少しも矛盾なくほかの理由を、それも、もっと高級といえる理由を採用できたはずである。つまり、ある種の快楽はほかの快楽よりもいっそう望ましく、いっそう価値があるという事実を認めても、功利の原理とは少しも衝突しないのである。ほかのものを評価するときには、量のほかに質も考慮されるのに、快楽の評価にかぎって量だけでやれというのは不合理ではないか。

それでは快楽の質の差とは何を意味するか。量が多いということではなく、快楽そのものとしてほかの快楽より価値が大きいとされるのは何によるのか。こうたずねられたら、こたえは一

つしかない。二つの快樂のうち、両方を経験した人が全部またはほぼ全部、道徳的義務感とは別にはっきりと選ぶほうが、より望ましい快樂である。両方をよく知っている人々が二つの快樂の一方をはるかに高く評価して、他方より大きい不満がともなうことを承知のうえで選び、他方の快樂を味わえるかぎりたっぷり与えられてももとの快樂を捨てようとしなければ、選ばれた快樂の享受が質的にすぐれていて量を圧倒しているため、比較するとき量をほとんど問題にしなくてよいと考えてさしつかえない。

ところで、両方を等しく知り、等しく感じ享受できる人々が、自分のもっている高級な能力を使うような生活態度をはっきり選びとることは疑いのない事実である。畜生の快樂をたっぷり与える約束がされたからといって、何らかの下等動物に変わることと同意する人はまずなかろう。馬鹿や愚鈍や悪漢のほうが自分たち以上に自己の運命に満足していることを知ったところで、頭のよい人が馬鹿になろうとは思えないだろうし、教育ある人間が無教養な人間に、親切で良心的な人が下劣な守銭奴になろうとは思わないだろう。こういう人たちは、馬鹿者たちと共通してもっている欲望を全部、もっとも完全に満足させられても、馬鹿者たちより余分にもっているものを放棄しないだろう。この人たちが放棄を考えるようなことがあるとすれば、それは、極度の不幸に陥って、たとえ彼らから見てどんなに望ましくなくても、自分の運命を他人の運命ととりかえるほかにその不幸を免れる途がないときにかぎられよう。高級な能力をもった人が幸福になるには、劣等者より多くのものがあるし、おそらく苦悩により敏感であり、また必ずやより多くの点で苦悩を受けやすいにちがいない。しかし、こういった数数の負担にもかかわらず、こんな人が心底から、より下劣と感じる存在に身を落とそうなどとはけっして考えるものではない。この、下劣な存在に身を落としたくないというためらいについては、なんとでも説明できよう。たとえばそれを誇りに帰すこともできる。誇りとは、人類がもつことのできるもっとも尊敬すべき感情につけられた名称だが、また同時にもっとも尊敬すべからざる感情の名称でもある。また、これを、自由と個人の自主性への熱望のせいにしてもよい。こういうものに訴えることが、ストア派にとってこのためらいの気持ちを銘記させるいちばん有効な手段であった。権力欲、または感激欲に帰すこともできよう。これらは現に、この下劣なものに身を落としたくない気持ちの中にはいりこみ、この気持を助長している。だが、それにいちばんふさわしい呼び名は、尊嚴の感覺である。人間はだれでも、なんらかの形で尊嚴の感覺をもっており、高級な能力と嚴密にではないが、ある程度比例している。この感覺が強い者にとっては、これと衝突するものは、瞬時をのぞけば、いっさい欲求の対象たりえないほど、彼の幸福の本質的部分をなしている。

この選択が幸福を犠牲にして行われると想像する者——同じような環境のもとでは、すぐれた人間は劣った人間より幸福でない想像する者——は、幸福と満足という二つの非常に違い觀念を混同しているのである。感受能力の低い者は、それを十分満足させる機会にもっとも恵まれているが、豊かな天分をもつ者は、いつも、自分の求めうる幸福が、この世では不完全なものでしかないと感じるであろうことはいふまでもない。しかしこういう人も、不完全さが忍べるものであるかぎり、忍ぶことを習得できる。そして、不完全だからといって、不完全さを

まるで意識しない人間^{うらや}羨んだりしないだろう。不完全さを意識しないのは、このような不完全さをもつ（高級な）善を感じる能力が全然ないということだからである。満足した豚であるより、不満足な人間であるほうがよく、満足した馬鹿であるより不満足なソクラテスであるほうがよい。そして。もしその馬鹿なり豚なりがこれとちがった意見をもっているとしても、それは彼らがこの問題について自分たちの側しか知らないからにすぎない。この比較の相手方は、両方の側も知っている。（J. S. ミル『功利主義論』第2章）

「エピクロスからじまる古代ギリシア哲学の一派。おだやかな快楽と、苦痛の回避を求める人生が望ましいとした。

- ・ 快楽の質の差。ある種の快楽はほかの種類よりも望ましく価値がある。
- ・ 快楽の質の判断は、それらをよく知った人が判断できる。
- ・ 高級な能力を使うことを知った人は常にそういう能力を使うことを望む。
- ・ より下等な存在に身を落としたくないという欲求。←自尊心、自由への熱意、権力欲などからもそう望むが、なんといっても「尊厳の感覚」から。
- ・ 尊厳の感覚は高級な能力とほぼ比例する。
- ・ 幸福や快楽を求めるとかえって幸福でなくなる？
- ・ 幸福はさまざまな快楽と数少ない一時的な苦痛からなる。長い平静と短期的な興奮。
- ・ 利己心は幸福を減少させる。むしろ他人への関心が幸福を形作る。

幸福を人生の目的と考えるように教わったら、人間は果たしてそのようにつつましい幸福にあずかるだけで満足するだろうか、と。だが人類の大多数はこれまでもっとわずかで満足してきたのである。満足した生活のおもな内容は二つあり、そのどちらか一方だけで、しばしば目的を達成するに十分である。その二つとは、平静と興奮である。平静さが豊かに恵まれておれば、ほんのわずかの快楽で満足できよう。興奮が多ければ、かなりの量の苦痛でも我慢できる。大衆が両方を兼備することなど金輪際不可能だとは言いきれない。この二つを両立しないどころか自然に結びつくものであり、一方が長びけば他方が準備され、他方を熱望させるはずのものだからである。ただ、怠け心が高じて悪徳となっている人だけが、休息の後にも興奮を求めない。また、病的に興奮を求める人だけが、興奮後の平静を、先だった興奮に比例して愉快には感ぜず、退屈で気の抜けたものと感じるのだ。かなり幸福な境遇にある人が、人生に価値を認めるにたる程の享楽を見いださないのは、およそ、自分のことしか考えないからである。公私にわたって愛情を欠く人には人生の興奮は非常に削減されたものとなり、いずれにせよ、いっさいの利己心が終息するする式に近づくにつれて、その価値は減ってゆくほかない。これに反して、自分の死後に個人的愛情の対象を残す人、とりわけ人類の全体的利益によって同胞感情を開発した人は、死の前夜でも、若さと健康に恵まれて元氣旺盛であったときと変わらず、人生に澆刺たる興味を持ち続けるのである。（J. S. ミル『功利主義論』第2章）

- 精神の開発、教養の必要。

利己心に次いで人生に不満を抱かせるおもな原因は、精神の開発〔教養〕不足である。開発された〔教養ある〕精神——といっても、哲学者の精神をいうのではなく、知識の泉が開かれており、かなりの程度その能力を鍛えるように教わっている精神——は、周囲のあらゆるものに、尽きることのない興味の源泉を見出す。たとえば自然の事物、芸術品、詩的構想、歴史上のできごと、過去から現在にわたる人類の足跡、さらにはその将来の展望などに。なるほど、これらすべてに対して無関心になることができる。それも、それも、その千分の一も味わい尽くすことなくそうなることができる。けれどもそんなことは、人がこれらのものにはじめから、道徳的・人間的な興味をまったくもたず、これらのものに好奇心を満足させることばかり求めた場合にかぎるのである。ところで、以上のような観照の対象に、理解に富んだ興味を抱くに足るだけの精神の開発〔教養〕が、文明国に生まれたすべての人にうけつがれてならない理由は、本来絶対になりたない。同じように、人間は誰もが利己的な自己中心主義者で、感情や配慮を憐れむべき自分の独自性にしか集中できないという本質的必然性もないのである。これよりずっとすぐれた状態が今日でもごくふつうにみられ、人間という種族がどうつくりあげられるかについて十分な前兆を示している。純粋な私的な愛情と、公共善への誠実な関心を持つことは、程度の差はあっても、正しく育った人ならだれにでもできることである。こんなにたくさん興味をひくものがあり、こんなにたくさん享受すべきものがあり、さらにまたこんなにたくさん是正し、改善すべきものがあるこの世界では、この程度のふつうにみられる道徳的・知的資源を備えた人なら、誰もが羨むにたる生活を送ることができる。そしてこの種の人には、悪法のためや他人の意志の屈従したため、手近な幸福の源泉を利用する自由を奪われているのでないかぎり、人生の明々白々な害悪——貧窮、病気とか、愛するものの冷淡・無能・若死といった肉体的ならびに精神的苦悩の大根源——を避ければ、この羨むにたる生活を見つけ損ねることはない。したがって、問題の焦点は、このような災害との抗争にある。災害を完全に免れることは稀有の好運である。現状では、このような災害はなくせない。大幅に緩和することさえ、なかなかできないのである。にもかかわらず、多少とも傾聴に値する意見の持ち主ならば、世界の明々白々な大害悪の大半はそれ自体なくせうるものであること、また人事諸般の改善が続くかぎり、ついには狭い範囲に縮小してしまうであろうことを疑う（J. S. ミル『功利主義論』第2章、伊原訳）

- ミルの『自伝』でも幸福に関して興味深い記載がある。

あの体験〔青年期の重い鬱状態〕以後、幸福というものは、それを直接の目的としないときのみ達せられるものだと考えるようになる。自分自身の幸福以外のことに目的を定め、ひたすらそれをめざす人だけが幸福なのだと私は思った。それは他の人の幸福や社会の改善進歩であ

るかも知れないし、技を磨き研鑽を積むといったことであるかも知れない。いずれにせよ、それらを幸福になるための手段としてではなく理想の目的としてめざす人だけが、幸福なのである。私のこの考えに従えば、快楽は、それを直接の目的とするのではなく別のことをめざす過程で味わったときにだけ、人生を快いものにできる。もしも快楽だけを追い求めるならば、手が届きそうになった瞬間にもっと欲しくなるだろう。確かめようとする、するりと逃げていくだろう。今自分は幸福かと自問した瞬間に、人は幸福でなくなる。幸福以外のものを人生の目的とすることが幸福になる唯一の道であり、そちらの目的の方を大いに意識し、吟味し、自問すべきである。そのうえで他の条件が幸運にも整っていれば、つまり幸福にこだわってそればかり考えたり、想像たくましく将来の幸福を思い描いたり、自分が幸福かどうかを気に病んでせっかく手に入りかかった幸福を取り逃がす愚を犯さない限り、空気を吸い込むように自然に幸福が訪れるだろう。私の人生観は、こうした考えに根ざすようになった。そして快楽をほどほどに追求しほどほどに味わう人、つまり大多数の人も、こう考えるのが至当であろうと今も信じている。(ミル『自伝』、村井章子訳, pp.121-122)

4 ラッセルの『幸福論』

- ・ミルが名付け親になったバートランド・ラッセル (1872-1970) は哲学分野で重要な業績を残したが、壮年期以降はわかりやすい哲学的エッセイで人気を博した。特に『幸福論』(1930) と『教育論』(1926) 『結婚論』(1929) はよく読まれた。

参考文献

- Bentham, Jeremy (1962) “The Rationale of Reward,” in Bowring, John ed. *The Works of Jeremy Bentham*, Russel and Russel, First Published In 1825.
- Redman, Ben Ray ed. (1963) *The Portable Voltaire*, Viking Press.
- ミル (1967) 『功利主義論』, 伊原吉之助訳, 中央公論社, 中公世界の名著『ベンサム・ミル』.
- (2008) 『ミル自伝』, 村井章子訳, みすず書房.
- (2021) 『功利主義』, 関口正司訳, 岩波書店.
- ラッセルバートランド (1991) 『幸福論』, 安藤貞雄訳, 岩波書店.
- ヴォルテール (2010) 『ヴォルテール哲学コント集成 <上>』, 植田祐次訳, 国文社.